慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オケオ出土の嬰鳳鏡
Sub Title	On the ancient bronze mirror (kiho-kyo, 嬰鳳鏡) excavated in Oc-Eo, Cochinchina
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1964
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.37, No.3 (1964. 11) ,p.5(247)- 9(251)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19641100-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オケオ出土の夔鳳鏡

梅原末治

一

戦後程経て仏蘭西の遠東学院が行つた印度支那南部のオケオ（Oc-Eo Cochinchine）遺跡の発掘調査は、見出された遺物の中に、遙かな西方の羅馬の遺品が含まれていると共に、他方で中国後漢代の文物も並び存すると云う顕著な事実を明らかにした。一九五七年にその調査の概要がセデス博士（George Coedes）に依つて Artibus Asiae Vol. X. No. 3 誌上に掲載されて、遺物の主要なものの紹介がなされ、それ等から遺跡が史に伝える扶南の海港に比定されることが指摘されたことから、広く学界の関心を高めたのである。

是等の出土品に含まれた、明確な中国の文物としての一面の古鏡は、後漢代の鏡式に属する夔鳳鏡であること、その挿入の図に依つて示されていることであるが、鏡そのものは六分の二大の破片であるに加えて、挿図の不鮮明よりして、その性質を確めるに不充分なうらみをのこした。私は戦時中印度支那に出かけて遠東学院関係者の特別な配慮の下に、東京安南地区から出土した数多い中国古鏡の調査を行つた関係もあつて、本オケオの右の鏡に自から関心を持つたことであつた。たまたま一九五九年九月第一回東洋学者連絡会議の為に巴里に出掛けた際、オケオ出土の主要な遺物がギメ博物館に陳列されていて、右の鏡を観るの幸を得た。依つて学院長マァルレー氏（Louis Malleret）に実物の詳しい観察を通じて、鏡

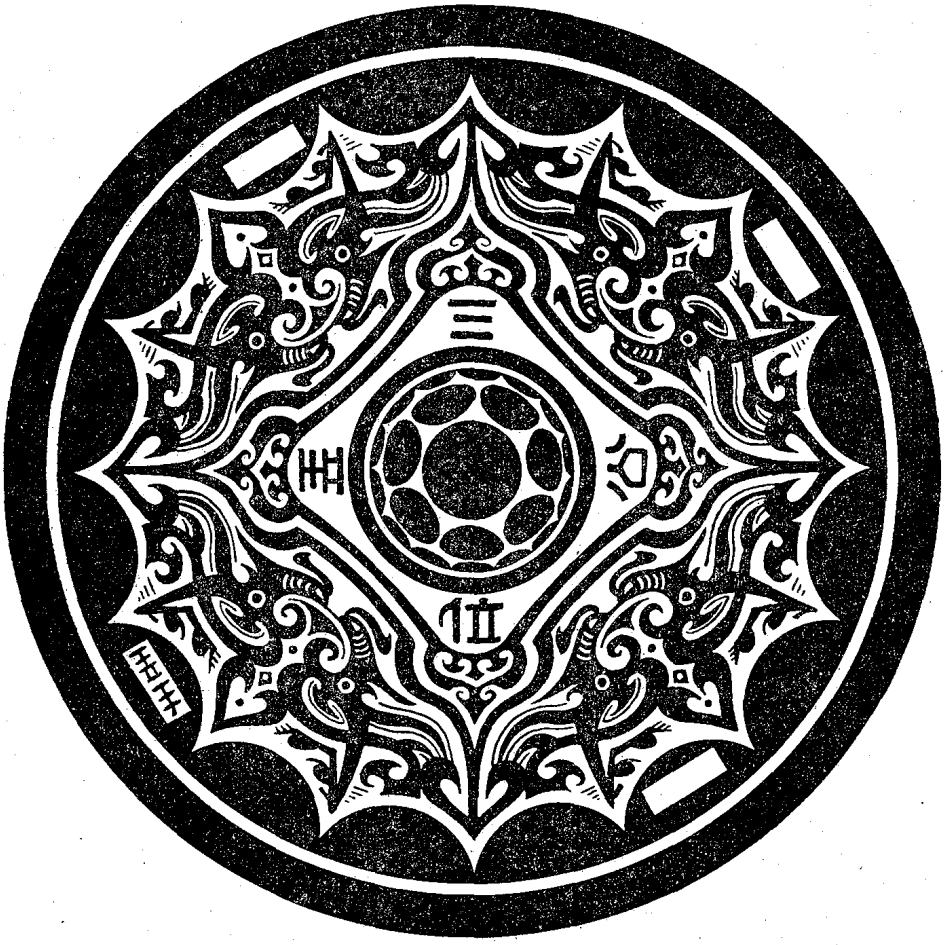
そのものゝ復原への許容を請うたのであつた。然るにケースから取出しての詳細な調査は遂に許されなかつたが、此の際別にエリセイフ氏（Vadime Ellisseéff）より実大の焼付写真―それはセデス博士の一文の挿図のものと同じであるが、より鮮明なもの―の寄与を受け、硝子越の観察を通じて、鏡そのものゝ知見を深めることが出来たのは、エリセイフ氏に向つて深く謝するところである。昨年この遺跡の詳しい調査報告（Louis Malleret; L'Archaéologie du Delta du Mé-kong, tome second; La Civilization Materielle D'oc-Eo. pp. 213～234, Pl., XCII, Paris, 1960.）が公にせられたのを機会に、右の鏡についての白木原和美君の書き上げた復原図を載せて、同書で不充分に見える鏡そのものの所見を記することとする。

二

さてオケオ出土に係るこの一面の中国鏡は、第一図に載せた写真――これはセデス博士の一文に掲載のものと同じもの――の示すように、一端に鈕をのこすが、もとの約三分の一を超えない破片であつて、原径は約一三糎の大きさである。この破鏡の背紋は、鈕を繞つて所謂糸巻状図形があり、それと外縁に接する半円弧紋帯との間に、相向う双禽形を配したものであるのは、漢式鏡中で、獣首鏡と並んで目立つ古い系統の一たる、夔鳳鏡に他ならないことを示している。并し写真からでは先ず背面の銹化などがあつて、主紋たる双禽形が明らかでないばかりでなく、その糸巻状図形内の文字が不鮮明である。加えるに鈕はたゞの素鈕とは見えず、また外辺の半円弧紋帯の一に長方形の区画が作られなどして、普通な同式鏡との間に細部の上で違いがある。

是等のうち、構図の上から四度繰返された双禽形は、実物に就いての観察を通じて、相向う双禽中での最も整つたものであること、復原図に描き出した如くであるのが確かめられる。これを繞る半円弧紋帯が十六個から成つて、弧形が目立

第一図　出土鏡片実大写真



第二図　同復原図

つのは、この式としてまた整斉なものである。鈕を繞る四出の糸巻状図形もそれに相応ずるもので、この内に配した各一字宛の文字は、実物では右行の「位至」の二字が確められ、また外辺の内行弧紋の一の方形格内には「主至」の二字が読まれる。ところで二つの銘文中、前者は従来知られている同式鏡の実例からすると、欠失した部分の二字は「三公」であること明らかである。これに較べると、後者は現存するのは一区のみであるが、鏡そのものゝ構成からは、例えば故桑名鉄城翁蒐集の一鏡と同様に四方にあつて、右の主至ではじまる四字の対句であつたことが推されて、欠損した、その文の後半の「長宜子孫」でもあつたろうことを推測せしめるのである。次にこの鏡での写真から認められる異様な鈕形は、実物に就いて仔細に観察すると、これがまた一つの図紋をなすのである。即ちそれは鈕上での、やや大きな円形を繞つて七個の円珠形が配され、更に下側に十四個の半円弧紋をそれ〴〵薄肉で表わしたものであること復原図に描いた如くであつて、注意を惹くのである。鏡の鈕が所謂九曜形なり虺竜などの形をした前漢頃までの中国古鏡を除くと、鈕に図紋を飾る現存例は、後漢代に見受ける本夔鳳鏡なり獣首鏡などと云う背紋の平面的な鏡式に限られていて、それは相向う竜形である場合が多い。この間にあつて、本鏡の鈕と全く符節と併せたような花紋鈕のものは、永康元年（167 A. D.）と光和元年（178 A. D.）の鋳造の年紀のある獣首鏡なり、中平二年（189 A. D.）の四獣鏡にまた同例を見るのである。そして前二者は共に漢の官工たる尚方での作竟たることを、その銘文が同時に示しているのである。

このように復原すると、この鏡は夔鳳鏡式のうちにあつて、構図の上で最も整つたもので、所謂形式的な便化などのないものであること、而してその鈕形の上で、西紀二世紀後半の、漢の尚方での作品と同様であることが知られるのである。

中国に於ける夔鳳鏡の行なわれた時代に就いては、我が国ではその構図が古銅器の系統を承けたものであることとよりし、また其の式に属する鏡が筑前須玖の弥生式甕棺墓で多数の前漢鏡と伴出した事などよりして、嘗ては前漢に遡るので

はないかとせられた。併し現存の多数の同式鏡からすると、この鏡式たるや、複雑化した漢時代の諸鏡の間にあつて同じ平面的な背紋表出の獣首鏡と並んで、後漢代に入つてからの、古い禽獣紋を承けた復古式の新たな鏡式であることは疑う可くもない。而してその標式的なものの鋳造の時代が西紀二世紀の寧ろ後半にあつたこと、同時に六朝の上半に亘つて行なわれたもののあることは、それぞれの禽形なり図紋の上から認められる。されば本オケオの遺跡から出土した夔鳳鏡がこの鏡式の中での本格的なものであることは、遺跡の性質を推す上に当然重要視される可きである。なお此の場合本邦上代にも同式鏡の同じく舶載されていることは、この文物を通じての漢代文物の四隣への波及の具体的な面を示唆するものとして、吾々にとつて別個な興味を与えるものでもある。

（参照）筑前須玖遺跡出土の夔鳳鏡に就いて『古代学』八